

札幌メディア・アーツ・ラボ(SMAL)開設記念

特別講演&シンポジウム

創造都市さっぽろ「メディア・アーツ都市」がめざすもの

featuring **Stephen Beck**

最新作"NOOR"
ハイビジョン特別上映

ジョン・ケージ、ナムジュン・パイク、ジミ・ヘンドリックス、
時代の先駆者達と共演してきた、ビデオ・アートのパイオニア
ステファン・ベックによる特別講演
「ビデオスペース—ポスト・デジタル時代のライフ・クオリティ」

"VIDEOSPACE-Life quality in a Post Digital Era"



「私にとって芸術のゴールとは、共感化です。
苦しみと暗闇に満ちた世界に、生活の美を明らかにすること。
光とビデオの作業は、私が求める最新の形式、最新の経路、最新の方法なのです。」

—— ステファン・ベック

●ステファン・ベック氏略歴／ビデオをはじめとする映像芸術の先駆者、科学者、発明家。イリノイ大学で電子音楽と作曲を学び、当時イリノイ大学にいたジョン・ケージのマルチメディア・コンサート「ヒップ・スキッド」に参加、カリフォルニア大学バークレイ校では電子工学とコンピューターサイエンスを学ぶ。1960年代、ナムジュン・パイクと同時期にビデオアートを発表。68年、「ダイレクト・ビデオ・シンセサイザー」を開発。78年には「ユニオン」でイタリア賞を受賞。ニューヨーク近代美術館やパリ近代美術館をはじめ、世界中の美術館においてビデオ作品が紹介され、これまでに200回以上の展覧会を開催している。91年、「第2回名古屋国際ビエンナーレ・アーテック'91」では石とビデオを使った作品《仮想の噴水》を出品。また、電子ゲームやヴィジュアルイゼーションの分野で多くの特許をもつ。ジミ・ヘンドリックスの伝説的なコンサートではヴィジュアルを担当し、ローリー・アンダーソンのコンサルタントを務めた。現在、UCLAバークレイ校教授。

2012年 **10月5日** **金**

北翔大学北方圏学術情報センター「PORTO」ポルトホール 札幌市中央区南1条西22丁目1番1号

◎18:00開場／18:30開会 — 21:00閉会

参加無料 事前申込制:定員300名

参加ご希望の方は9月25日(火)までに事務局に必要事項をご記入の上、お申込み下さい。定員になり次第、締切とさせていただきます。



SAPPORO MEDIA ARTS LAB

ユネスコの創造都市ネットワークに、「メディア・アーツ都市」として加盟申請をめざす創造都市さっぽろ実行委員会は、2014年に開催される札幌国際芸術祭実行委員会と合流し、産官学民から編成される札幌メディア・アーツ・ラボ(所長・武邑光裕)を2012年7月に設置しました。SMAL(通称:スモール)は、メディア・アーツに関連するクリエイティブ産業の振興や、さまざまな地域課題に向かい合い、札幌における文化芸術やクリエイティブ人材の育成に寄与していくことをミッションとし、創造都市の理念を具現化していくさまざまなプロジェクトを実行していきます。従来からの大学ラボ、企業や産業技術の開発ラボと異なり、SMALは、その名の通り、小規模ながら地域のクリエイティブ産業の振興に寄与する「市民ラボ」をめざします。

◎主催:札幌メディア・アーツ・ラボ(創造都市さっぽろ・国際芸術祭実行委員会)・北翔大学 アートと生活をつなぐ創造的活動拠点づくり研究プロジェクト ◎後援:札幌市
問い合わせ先:札幌メディア・アーツ・ラボ事務局 札幌市中央区南1条西20丁目1-6 コミュ120 (株)T.C.P内 TEL:011-622-5110/FAX:011-622-5029 担当:林

光を照らすメディア・アート ——ステファン・ベックの40年

武邑光裕(札幌メディア・アーツ・ラボ所長)

18:00 開場

18:30 主催者開会挨拶

相内眞子(北翔大学学長)

18:35 特別講演(60分)

「ヴィデオスペース・ポスト・デジタル時代の
ライフ・クオリティ」

"VIDEOSPACE-Life quality in a Post Digital Era"

ステファン・ベック氏

(ビデオ・アーティスト、UCLAパークレイ校教授)

最新作"NOOR"ハイビジョン特別上映を
おこないます。

19:45 シンポジウム(70分)

「次代のメディア・アーツがめざすもの」

パネリスト

◎ステファン・ベック氏

◎小室晴陽氏

北翔大学 芸術メディア学科教授、工学博士、
一級建築士、SMAL特別研究員

◎深津修一氏

映像プロデューサー、株式会社プリズム代表取締役、
SMAL研究員

◎安田光孝氏

北海道情報大学 情報メディア学部准教授、
情報メディア学科・メディア・クリエイティブ・
センター長、SMAL特別研究員

モデレーター

武邑光裕氏

札幌メディア・アーツ・ラボ所長、

創造都市さっぽろ・国際芸術祭実行委員会 副会長

21:00 閉会



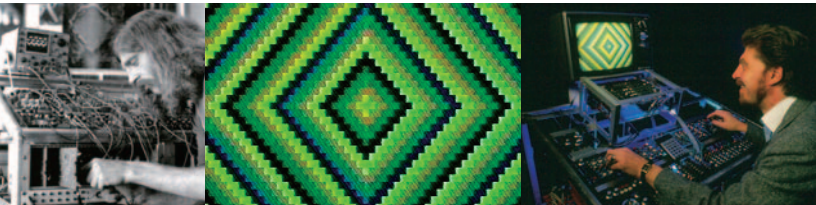
※応募締切日は9月25日(火)です。定員になり次第、締切らせていただきます。あらかじめご了承ください。
※参加申し込みにより得られた個人情報は、本イベント参加確認以外の目的には使用しません。

メディア・アーツの起源をたどることで、私たちは今日のインタラクティブ・メディアから3Dマッピングの表現過程に、多大な貢献を行ったひとりの多面的な創造性にたどり着きます。ビデオ・アート、メディア・アートのパイオニアとして世界的に著名なステファン・ベック(Stephen Beck)は、1960年代後半、ナム・ジュン・パイク(ビデオ・アートのパイオニアのひとり)と同時期に、果敢な映像と音の共感覚世界を提示し、その後ビデオ、インスタレーション、マルチメディア機器の開発、ミュージック・ビデオ、ビデオゲーム、ロック・コンサートにおける映像表現、パフォーマンスに及ぶ、境界なき表現世界を開拓してきました。彼を「デジタル・ダ・ヴィンチ」と呼ぶ意味がここにあります。1969年から1970年の間、サンフランシスコのKQED・テレビ(NCET)に設置された国立実験センター[※1]の招待電子芸術家として、ベックはカメラレスで美しく無限に変化するビデオ映像の可能性を示す「ダイレクト・ビデオ・シンセサイザー」を開発、アナログ・イメージをリアルタイムで操作する画期的な開発に成功します。

ビデオカメラを介在させることのないテレビモニターからの自発な光、その非具象的なパターンの連続的な変化は、芸術家の内面性の経験や多文化的な非言語に翻訳され、作品の独自性を強調しました。ベックは次のように述べています。「私はイメージの生成を、音楽を聞くこと、イメージを奏でることと同じであると考えました。また、私がしばしば行う視覚芸術とビデオ作品の多くは、私が心の目で見えるものに基づきます。私は、自らの眼を閉じることで、内部のイメージの探索に向かっていきました。少年時代から、私は内部のイメージである眼内閃光、直感像、幻覚、瞑想の視覚要素を捉えるために、音楽との共感覚に取り組んできました。私は視覚的な作曲のために、電子の楽譜を開拓したのです。」[※2]ベックの映像は、小さく回転する粒子から始まります。恐らく原子のイメージであり、磁気、重力、正弦波に基づいた軌道の運動、そして1次元のポイントから線形の織物に至る2次元の視覚変化は、色彩豊かな渦巻運動を開始します。ベックの電子映像は、電子音楽(ベックはイリノイ大学のジョー・ヤングブラッドは、彼の著作「拡張したシネマ」[※3](1970)の中で、ビデオやコンピュータを包含した発展性のある作品の中に、アメリカ西海岸で既に起こっていたエンジニアと芸術家との間の共同作業、カウンター・カルチャーの成果を指摘しています。)リリスミス、ジョーダン・ベルソンおよびホイットニー兄弟、そしてベックの作品に、私たちは、マン・マシ

共生の創造的な端緒を発見することができます。この時代、テクノロジーは、国家や大企業が独占するものではなく、芸術的表現やサービスのツールとなったのです。色彩やイメージを持つ音楽を、ベックは「光景」と隠喩し、「音楽を描く」という彼の意図は、共感覚(synaesthetic)な結合を達成することでした。形式、色彩、電子の生地および運動の作成および操作によって、ベックは視聴覚の新たなストーリーを構築する際の、リアルタイムで生成される電子イメージを導入しました。ベックの電子映像(毎秒25フレーム)は、後のニューメディアの相互作用および共同参加のプロセスの加速に寄与しました。彼は、「この時点の、リアルタイムなビデオ上映は、前デジタル時代でした。」と言います。「プログラミングも、前録画(ビデオ)もありませんでした。それはシンセサイザーによってライブで操作されていた。私は今、前デジタル時代からポスト・デジタル時代に至るまでのアート・スパンに興味を持っています。私がビデオを始めた時代を意味する前デジタルは、1960年代の終わり、すべての実目的のために、多くは存在していません。現代のデジタル・コンピューティングでは、誰もがビデオ・アーティストです。しかし、これらの映像を意味するポスト・デジタルは、今社会のすべての領域に浸透しはじめています。私は今、自分についての記述として、ライブ、またアナログやアナログの「生地」(物質的実在)を重視します。このアナログ・アプローチは、もちろん、私がデジタル・ツールを使用している、作品や次代の世界観にとっての重要な品質管理となるのです。」

ベックの最も有名なビデオ作品に、「ボードゥー・チリ」(1982)(ジミ・ヘンドリックスの音楽を備えたミュージック・ビデオ)があります。そこで、私たちはイメージから音楽を分割することはできません。光学の原初的なビデオ合成、ビデオ・フィードバックが多用され、アナログ・フラクタルによる原初的なアナログ・エネルギーは、現代のデジタル映像にさえ再現できないユニークさを持っています。パイオニアの時代から、40年が経過しました。音像共感覚の集大成である"NOOR" (2005-09) は、ベックの最新のプロジェクトです。東洋、中東文化からのイメージや文様およびモチーフが、抽象形態とパターン運動を伴って生命的な律動を表現します。"NOOR"は生きている有機体です。彼は今、カリフォルニア大学パークレイ校で若き学生たちと共に次代のアートを熟考します。ベックは、ビデオ媒体と文化の接続という、彼のビジョンを組み立てる最新の方法に取り組んでいます。「私にとって芸術のゴールとは、共感化です。苦しみと暗闇に満ちた世界に、生活の美を明らかにすること。光とビデオの作業は、私が求める最新の形式、最新の経路、最新の方法なのです。」1989年、初めてサンフランシスコでベック氏と出会い、私たちはともにデジタル時代の急速な変化の到来と関わってきました。デジタル技術やインターネット環境、そしてソーシャルメディアの到来にまで、この20年間の変化は、希望を照らす「光」だけでなく、社会に多くの闇をも喚起してきました。現代アートやメディア・アーツがどのように本来の「光」を見出しえるかを、彼とともに考えたいと思います。



●1970年、NCETで開発したビデオシンセサイザーとステファン・ベック ●Synthesis, 1971-74, 28:56min, color, sound

※1 National Center for Experiments in Television (NCET)

※2 2012年3月27日、サンフランシスコの自宅でインタビューによる。本文中のベックの発言は、すべて同インタビューによる。

※3 Expanded Cinema by Gene Youngblood (1970), E P Dutton; First edition (January 1970) ISBN-10: 0525472630

申込書(必要事項をご記入の上、FAXでお申し込み下さい。)

FAX011-622-5029

お申し込み締切9月25日(火)

☐ 札幌メディア・アーツ・ラボ(SMAL)開設記念 特別講演&シンポジウムに参加します。

フリガナ		男・女	合計参加人数
ご芳名 (もしくは代表者名)		歳	_____ 名
お電話番号	E-mail address		